人と自然と文化にやさしい地域づくり

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

明日を拓く ― 成果を検証する ―

11

令和３年　No.1317

令和２年度　第73回山口県学校美術展　推奨作品
「顕微鏡での観察」
周防大島町立安下庄小学校　５年（受賞時）　松田（まつだ）　大樹（だいき）

■体育科・保健体育科教育の充実

宇部市立見初小学校　校長　藤田　康伸
山口大学教育学部附属山口小学校　教諭　大賀　拓也
防府市立国府中学校　教諭　阿部　直之

■新支部長紹介

大島支部　支部長　大川　幸枝
下関支部　支部長　朝原　嘉彦
大津支部　支部長　三輪　和明

■支部の取組

周南熊毛支部　事務局長　吉松　俊久

■地域活性化活動助成事業

周南市立鹿野小学校　教頭　岡野　謙二

■現職研修助成事業（学校）

平生町立佐賀小学校　教頭　内山　裕史
山口市立阿東中学校　校長　藤本　正和

■やまぐち見てある記

上関町四階楼

一般財団法人　山口県教育会

〒753-0072　山口市大手町２－18　TEL 083-922-0383　FAX 083-922-5768
URL http://www.ykyoikuk.or.jp　E-mail ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp
明治36年4月第１号　毎月１日発行　発行人　会長：倉増誠彦／編集長：西岡　尚

豊かなスポーツライフの実現に向けて

宇部市立見初小学校
校長　藤田康伸

1　はじめに

大学の講義で、今でも心に残っているお話があります。鉄棒の授業で逆上がりの苦手な子どもが一生懸命練習をしていました。ですが、残念ながらうまくいきません。落ち込む子どもに担任も何とかしたいとアドバイスをし、放課後も練習に付き合いました。もくもくとがんばり続けたその子は、ある日ついに逆上がりができるようになりました。初めてできた子どもは大喜びで、担任も嬉しかったのですが、その子が喜びながらぽつりと言った言葉に愕然としたといいます。「これでもう、逆上がりの練習をしなくていいんですよね」。どうしてこんな結末になってしまったのでしょうか。

2　新しい学習指導要領のめざすもの

新しい学習指導要領では、予測困難な時代の到来を見据え、子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することや、その際、子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」の重視等が示されました。

そうした中、体育の学習においても、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」が求められています。

全面実施の節目にあたり、小学校体育を中心に考えを整理し、今後の活動に役立てたいと考えています。

3　見方・考え方を働かせる

この度の改訂では、すべての教科で各教科の特質に応じた「見方・考え方を働かせる」という言葉がでてきます。見方・考え方を働かせるとは、学習指導要領では「体育」と「保健」は分けられていますが、体育でいえば、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」と示されています。

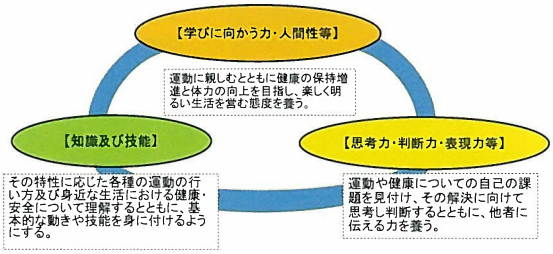
ここからは、運動する楽しさだけでなく、それとともに運動を続けることによって体力向上や健康の増進につながること、見ることや支えることや知ることといった多様な楽しみ方があること等を、子どもたちが気付いたり実感できたりするよう、学習を進めていくということがわかります。運動やスポーツのもつ魅力や楽しさ、価値等を実感し、多様な楽しみ方を大事にすることが、豊かなスポーツライフにつながっていくということが考えられます。

では、そうした見方・考え方を働かせながら、課題解決を通じて身に付けていきたい資質・能力とは何でしょうか。

この度の改訂では、すべての教科で身に付けたい資質・能力が「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に再整理されました。体育においても、それを確実に身に付けるために、その関係性を重視した学習過程を工夫する必要があることが示されています。（図参照）

学習過程の工夫のポイントは、「する、みる、支える、知る」等、運動やスポーツと多様に関わるようにすることを踏まえ、運動やスポーツへの興味関心を高めること、粘り強く意欲的に課題に取り組むことができるようにすること、自らの学習活動を振り返り、仲間と共に思考を深め、よりよく課題を解決して次の学びにつなげるようにすること、技能の指導に偏ることなく資質・能力の三つの柱をバランスよく育むこと等が大切です。

図：体育科で育てたい３つの資質・能力



4　おわりに

宇部市では「誰一人取り残さない『学び合い』の実現へ」をテーマに、授業にユニバーサルデザインの視点をもつことやＩＣＴを適切に活用することを積極的に進めています。そうした視点も大切に、すべての子どもたちが運動やスポーツの楽しさに触れ、健康のよさを理解し、子どもたちの「もっとやりたい」「もっと知りたい」といった明るく元気な姿が学校中で見られるよう、取組を進めていきたいと考えています。

最後になりますが、令和４年11月11日に「第60回中・四国小学校体育研究大会山口大会」が、光市立島田小学校、光市立浅江小学校を会場校として開催されます。新教育課程の実施から間もないこともあり、県外からも注目度の高い大会になっています。体育に関する最新情報や指導方法を学ぶよい機会としてご紹介をいたします。

楽しさに気づき、挑戦する気持ちを高める

エンジョイ！フォークダンス

山口大学教育学部附属山口小学校
教諭　大賀　拓也

第5学年フォークダンスの単元作りで大切にしたことを紹介します。

まず、フォークダンスの構成を理解することです。例えば、「マイムマイム」であれば、シングルサークルでかけ声があること。「パティケイクポルカ」であれば、ダブルサークルでパートナーチェンジがあることです。ステップや踊り方にのみ目を向けるのではなく、踊りの構成を理解することで、踊りのイメージが豊かになります。シングルからダブルへ段階を追って単元を仕組むことで、違った楽しさがあるのだねと振り返りながら、フォークダンスのよさや楽しさに気付くことができるのです。

次に、踊りの由来です。「マイムマイム」は、イスラエルのフォークダンスで、砂漠で井戸を掘り当てた歓喜を表現しています。マイム（水）というかけ声からも、その思いが感じられます。踊りに込められた思いを知ることで、喜びが表現できたよと振り返りながら、思いを表現する楽しさも実感することができるのです。

そして、ペア・集団で関わることです。感染症対策として手をつなぐことを回避するために、タオルでシングルサークルを作りました。また、軍手を着けることで、お互いにタッチすることもできました。フォークダンスの魅力として、仲間と一緒にペアや集団で踊ることが挙げられます。お互いの距離を可能な限り近づけることで、仲間を肌で感じながら踊ることができるのです。

初めは恥ずかしそうに踊っていた子どもたちも、フォークダンスの構成を知り、由来を学び、表現したいという思いをもつことで、仲間とともに踊る楽しさを存分に味わえたと思います。フォークダンスならではの楽しさに触れた子どもたちは、とてもステキな笑顔でした。

歓喜を表現しながら踊っている様子

やまぐちスマートスクール構想に向けた授業の展開

防府市立国府中学校
教諭　阿部　直之

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を目指した「やまぐちスマートスクール構想」が推進されています。1人1台配付されたタブレット端末の活用に向け、日々模索しながら授業づくりに取り組んでいます。走り幅跳びの授業の様子を紹介します。

毎時間、握力向上に向け、高鉄棒でぶらさがりを行います。生徒は、春の自分の記録をもとに、個別に目標を設定し、ペアで活動します。生徒からは「もうすこし、ファイト！」「よく頑張ったね」など応援やねぎらいの声が飛び交います。個別に時間を設定しているので、それぞれの目標達成に向け、一人ひとりが粘り強く取り組みます。また山口県教育会の研究補助を受け、握力計の台数を増やし、月に1度は握力の計測を行い、0.1kgでも伸びがあれば生徒は大喜びです。生徒間通信の機能を活用して、保健体育委員が記録を集約し結果を学年廊下の大型テレビに提示しています。クラスマッチなので生徒のやる気もアップしています。

走り幅跳びの学習活動では、東京五輪金メダリストの跳躍映像を各生徒に配信し、踏切の際の体の角度や着地の様子を確認します。大型提示装置などが使えない屋外では非常に有効です。その後、ペアやグループでお互いの跳躍を撮影・再生し、友だちと活発な意見交換を行うなど、協働的な学びを行っています。振り返りでは、本時の反省や次時に向けての課題を端末に入力しますが、お互いの振り返りを画面を通して短時間で確認できることや、プリントの配付・回収時間を省くことができるのも強みです。さらに有効に活用し、生徒の体力や技能の向上のために研修を深めていきたいです。

端末を使った動画撮影（走り幅跳び）

先輩の姿から

大島支部
支部長　大川　幸枝

退職と同時にいくつかの組織に属し、そこで、懐かしい方々と再会するたびに、現役に戻ったような気持ちがしていました。そして感じたのは、組織が組織としての活動を円滑に行っていくために、これまで、多くの方々が運営に関わってきておられ、私たちは、その方々のお世話になってきているのだということです。

教育会大島支部においても、私の前任の地区委員さんは、約10年間も『山口県教育』を毎月、会員の皆さん宅へ届けておられたと伺いました。また、会のお世話をしてくださっていた代々の支部長さんや事務局長さんの姿が、とても誠実であったことが印象深く心に残っているのです。そういうこともあって、先輩の皆様が誠実に取り組んでこられたことは、誰かが受け継ぎ、次へと引き継いでいかなければならないのだと思い、退職した年から地区委員を、その後事務局長を、そして、今回、支部長をお引き受けしました。しかし、これまでの実績を、きちんと次へつないでいけるかと考えると、自信はありませんが、会員の皆さんと共に、精一杯取り組んでいきたいと思っています。

コロナ禍にあって、支部としての活動は思うようにできませんが、会員それぞれが、できる範囲で活動しています。一例を挙げますと、私は今、助成をいただいて、地域活性化活動（ミモザの会）をしています。学校統合により地域の中学校はなくなりましたが、7月には、新たに開校した周防大島中学校から、生徒の皆さんや先生方も参加して、学校生活の様子を聞かせてくださり、和やかな会となりました。

今後も、大島支部でできる活動をみんなで考え、実践していきたいと思っています。

地域活性化活動『ミモザの会』

子どもの育ちを見つめる

下関支部
支部長　朝原　嘉彦

令和3年度第20回やまぐち教育の日・第48回教育県民大会下関大会は、県下の新型コロナウイルス感染拡大の状況からの収束が見通せず、やむなく開催は紙上報告ということになりました。会員のみなさまとお会いすることができず大変残念に思います。

昨今の社会情勢は、複雑で本当に変化の激しい、予測困難な時代となりました。私も、一昨年度に定年退職を迎え、学校教育の現場から離れるつもりでしたが、高等学校の現場にお世話になることになり、本年度からは教育会の下関支部長という大役をも引き継ぐことになりました。唯々、会員のみなさまにご心配・ご迷惑をおかけしないように努めていかなければと責任を痛感しております。

下関支部の活動も、お引き受けした大会の開催に向けて、下関地区としての実践と準備を進めてまいりましたが、前述したように紙上報告となりました。現在は、その取組みと成果を記した大会冊子をみなさまのお手元まで、無事に届けられるよう、田上文雄実行委員長（前下関支部長）を中心に、日々活動を重ねています。

この2年間の下関地区の取組みが紙上報告で終わることのないよう、引き続き、日々の子どもたちの成長を丁寧に見つめ、支えていくことを大切にしていきたいと思います。アフターコロナの時代を迎えても、実践の声が途切れることのないよう、新たな活動の方向性を見いだしていきたいと思っています。

下関支部の準備委員会

今だから　できることを

大津支部
支部長　三輪　和明

昨年のことですが、急に学級増になったので、常勤の臨時任用教員として勤めてほしいとの依頼を受けました。しかし、指導計画に従った教科指導は、10年近く遠ざかっていましたので心配でしたが、現職時代には様々な学校の危機を、その時々に臨時的任用の先生方に助けていただいたこともあり、その恩返しができればと思い、引き受けることにしました。

勤務する学校は、退職後、時々プログラミング学習の指導補助や学力向上指導などの支援活動に関わっていましたし、熱心に学習に取り組む子どもたちでしたので、年度途中でしたが、スムーズに教育活動を進めることができました。また、教科指導が中心の職務でしたので、授業づくりに専念することができ、教職の楽しさを再発見することができました。

退職して、わずか1年あまりでしたが、実際に学校現場に戻ってみると、リモートでの学校行事の実施をはじめ、新型コロナウイルス感染症対策の様々な取組により、教育活動が大きく様変わりしていることを目の当たりにして、改めて驚かされました。これまでも、教職員の多忙さはたびたび話題になっていましたが、２０２０年度から導入された新学習指導要領の適用や、ＧＩＧＡスクール構想をはじめとする、様々な教育改革の実現が進められている今、教職員の持てる力が発揮できる勤務環境を整えていくことが急がれるように思います。

コロナ禍の中で、今後学校支援活動をどこまで実施できるか分かりませんが、多少でも教職員の多忙感の解消に向けて、学校と情報の交換や共有を密にして、できる支援活動を進めていきたいと思います。

学習支援活動

「自ら参画する地域活動」をめざして

周南熊毛支部
事務局長　吉松俊久

周南熊毛支部の概要

平成15年の周南市の合併の際、旧熊毛町はそれまで属していた熊毛支部（現熊毛郡）から独立し「周南熊毛支部」として活動することになった。

地区内には幼・保園8園、小学校5校、中学校・高校各1校と小規模な支部で、会員数も140～180人の間を推移している。

活動方針及び活動内容

「人と人」「人と自然」が共生・共存し、子どもも大人も夢をもって生きる豊かなコミュニティーづくりを目指している。「自ら参画する地域活動」を第一義として次の二つを柱に、学校、地域・家庭、各種団体と連携し、活動の支援に力を入れ、歴史と伝統の継承発展に努め、住んでよかったと言える熊毛のふるさとづくりを目指している。

一　人と人とを大切にする活動

・地域のおじさんおばさん運動への協力
・「こどもゆめまつり」での土鈴の絵付け体験
・夏休み学習支援（小学校）
・土曜寺子屋、面接指導（中学校）

二　自然と文化を大切にする活動

・八代ツル給餌田の草刈り作業
・釈菜、ふるさと歴史講演会
・花いっぱい活動

八代の草刈り風景

土鈴の絵付け体験

主な活動

「花いっぱい活動」への支援

春秋2回の花苗の配布

①夏の花　サルビア、マリーゴールド、ポーチュラカ、メランポジウム、千日紅など

（4月）播種、かん水、草取り、間引き作業

（6月）配布作業（約2300本）

②ビオラの栽培

（9月）播種、植え替え作業

（11月）配布作業（約1400本）

県の助成を得て7年前から園、学校に花の苗を配布し、春秋全シーズンを通し花いっぱいの環境づくりに力を入れている。

育苗は前年の種の採取から始まり、播種や草引き、間引き、かん水などの管理があり、時間的にも技術的にも教職員には過重な負担となる。そこで会員が協力して育苗を担っている。花いっぱい活動は、各学校でも積極的な取り組みが見られ、市の花壇コンクールでも「最優秀賞」を連続で受賞する学校があるなど、各校が毎年優秀な成績を収めている。

花作りは、心豊かな子どもを育てる気運や園・学校・地域の美しい環境を醸成することができ、各地で成果を挙げている。今後、花の種類や本数、配布の時期、管理の方法等の要望にも耳を傾けながら、苗の配布を継続していきたい。

ビオラの苗作り

夏の花の苗作り

会員をつなぐ「支部だより」の発行

会の活動は会員から集金した会費によって行われている。有意義な活動を実施していくことは当然のことであり、年間の活動の様子を逐次報告していくことは会員の理解を得る意味で大切なことである。支部だよりを発行し始めて8年目を迎える。

A4用紙に表裏カラー印刷で印刷代はかかるが年3回発行し、5地区の委員が配布している。

紙面は活動状況の報告を中心に支部役員や会員の状況、助成金活用の様子、会員の声等を取り上げ、写真を多くしたり文字を大きくしたりして、見やすく、読みやすく、分かりやすい紙面作りをモットーに編集している。

この支部だよりの発行により、会員からは県の広報だけでなく、支部の身近な活動の様子がよく分かり、紙面が読みやすい等、概ね好評であり、活動の理解と共に会員増へ繋ぐことができていると思われる。

【発行時期と内容】

1号（4月）年度初めに前年度の活動の様子と会への加入のお願い、助成金申請のお願い等

2号（7月）総会終了後、その年の活動内容や方針、役員紹介、会員の加入状況等

3号（11月）これまでの活動内容と今後の活動のお知らせ等

支部だより2号（7月）

成果と課題

・近年子ども数の減少により、現職教員数は減少している。一方、会員数はわずかずつではあるが増加している。これからも会費を有意義に使い、入会してよかったと感じられる活動を展開していきたい。

・学校や地域の要望にできるだけ協力したいと考えているが、会員も高齢化し人数も限られているので、十分に応えられていないのが現状である。

次の150年につなぐ　地域と共に！

周南市立鹿野小学校
教頭　岡野　謙二

本校は、周南市の北部に位置し、古い歴史と文化を有する、自然に恵まれた鹿野高原の地にある。2003年に徳山市、新南陽市、熊毛町と合併して都濃郡鹿野町から周南市鹿野となった。地域には、小学校4年生、社会科の学習に登場する、岩崎想左衛門がつくった潮音洞がある。また、潮音洞の湧き出し口にある漢陽寺の庭園は、重森三玲が手がけたものであり、今年6月に国登録記念物に指定された。

創立150周年記念事業

本校は、1873（明治6）年3月1日に創立し、2023年3月に150周年を迎える。さらに、2022年度から、隣接する鹿野中学校が小学校の校舎に入り、「同一校舎内小中一貫独立校」として新たな歴史をスタートさせる。

創立150周年を、在校生、保護者、卒業生、地域住民、学校関係者が共に祝い、これからの鹿野小学校のあるべき姿を共に創造し、そして子どもたちがふるさと鹿野に夢と誇りをもつことを目的として、歴代のPTA役員が中心となり、2018年度にプロジェクトチームを立ち上げた。PTAは、2019年度から地域も加入したPTCAとなった。坂本俊彦実行委員長のもと、これまでに、20回近くの話し合いを重ね、2020年度からは、次の記念事業を実施している。

地域と共に花と緑の基軸づくり

本校は、「2011国体花いっぱい運動」を始めとして、石船温泉の近くにある「せせらぎ・豊鹿里パーク」での植樹体験や花育の授業など、花と緑の学校づくりを進めている。PTCAにおいては、地域と共に草刈りや花植えなどの環境緑化に力を入れていることから、150周年を機に、地域と共に鹿野の歴史と文化を継承しながら、さらなる花と緑の学校づくりに取り組むことにした。

◇茶の木植樹　2020年11月

鹿野茶は、お茶を日本に広めた臨済宗の僧侶の一人である、漢陽寺開山用堂明機禅師に始まる歴史がある。この鹿野のお茶文化を継承するため、校庭に児童が茶の木を植えて育てることにした。そして、150周年の記念式典で、おもてなし用のお茶として振る舞えることを楽しみにしてお世話をしている。

◇命輝け「友情の花壇」2021年5月

2005年に、当時3年生だった児童が病気で命を落とし、当時のPTA会長が中心となって、「思い出と命を大切にする心の醸成」を目的として、「友情の花壇」を作った。2016年には、20歳となった当時の同級生がフジバカマを植えたことでアサギマダラが飛来した。しかし、花壇づくりから16年が経過し老朽化が目立つことから、花壇を再生し、これからもずっと、子どもたちの友情や命を大切にする心の醸成をめざすことにした。6月には、子どもたちが育てたヒマワリの苗を植え、8月に満開となりキックオフミーティングに華を添えた。

「友情の花壇」再生

茶の木の植樹

キックオフミーティング　2021年8月

地域の内外へ、そして本校の卒業生に創立150周年を迎えることを周知するために、キックオフミーティングを開催した。計画当初は、運動場で青空同窓会を開催し、野外フェス、花火の打ち上げ、記念撮影を予定していたが、新型コロナウイルス感染症第5波の影響により、内容や開催の有無についてぎりぎりまで検討した。オンライン参加と、会場への入場制限を行うなど感染症対策を徹底し、鹿野中学校生徒のバンド、吉岡治さん、まあしぃさんのライブを実現し、その後花火が打ち上がった。また、婦人会が、交流のある台湾（鹿野高台）製のランタンを模して子どもたちが作ったランタンを飾り付けてくださった。

次の150年につなぐ

来年8月に「鹿野小同窓会」、再来年3月に「150周年記念式典」を計画している。今後も内容を変更せざるを得ない状況になることも予想されるが、「どうすれば何ができるか」を考え、よりよいものに工夫できるチャンスと捉えたい。そして、何より子どもたちが、150周年事業を通して鹿野を知り、鹿野とつながり、鹿野に誇りが持てるようにすると共に、地域に愛され、地域と共に次の150年を創造できる学校づくりをこれからもめざしていきたい。

鹿野花火

飾り付けられたランタン

感染症対策をした会場でのライブ

現職研修助成事業（学校）

校内の読書活動を起点とした地域連携読書の取組

平生町立佐賀小学校
校長　内山　裕史

本校は、後ろに大星山を背負い、前に瀬戸内海を望む、豊かな自然に囲まれた、全校児童45名の小規模校です。学校運営協議会を中心に、ボランティアによる見守り活動、花いっぱい活動、環境整備、授業支援、校内の消毒など、多くの学校支援活動が行われています。

1　自分の考えを多様な方法で伝える

校内及び学校運営協議会で協議を重ね、「自分の考えを多様な方法で伝える」を、本校児童に身に付けさせたい資質・能力の中核としてとらえ、教育活動を展開しています。

この資質・能力を育むために、年間を通じて、「読書貯金」「読書ビンゴ」「読書リレー」などの読書活動に全校で取り組んできました。

令和２年度から「読書が好きな子どもを育てよう」という機運が一層高まり、保護者や地域の方と連携して、読書活動の充実を図っています。

2　「読書リレー」から「地域連携読書」へ

学級内の友だちと読後の感想を伝え合う「読書リレー」を「地域連携読書」へと発展させ、新たな地域連携の取組を創り出そうと考えました。この「地域連携読書」では、児童・保護者・地域の方・教職員が１冊の本をバトンにして、読後の感想を交流することでたくさんの方の思いや願いに触れることができます。

コロナ禍において、地域の方と共に学ぶことが制限される中、読後の感想交流による「つながり」は、地域連携の新しい取組となりました。

3　社会に開かれた教育課程の実現に向けて

「読書リレー」を「地域連携読書」へと発展させて、地域とともに読書活動に取り組むことは、本校児童に身に付けさせたい資質・能力「自分の考えを多様な方法で伝える」の育成に地域全体で関わることとなります。

１冊の本から生まれるたくさんの心を紡ぎ、「読書好きな子ども」が育つ地域づくりにも貢献していきます。

一冊の本をバトンにして「読書リレー」

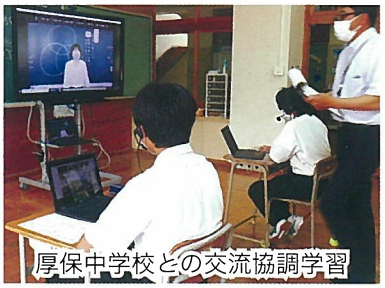
自信を育む指導の在り方 ～つながり深まる協調学習を通して～

山口市立阿東中学校
校長　藤本　正和

本校は山口市の北東部に位置する小規模校である。生徒の進路選択は、一番近い高校へもＪＲ通学となるため、県外を含めた山口線沿線、寮や下宿も視野に入れた幅広いものとなる。そのため、自律した人生を力強く生きぬく力を育成することを目標とし、一人ひとりの自己有用感を高め自信を育む教育活動を推進している。

特に授業改善では、生徒の自信を育み学力を確かなものにするために**〈課題を知る〉〈考えをもつ〉〈意見を交換する〉〈考えを深める〉**という学習活動を意図的に取り入れてきた。そして、その手段として知識構成型ジグソー法を活用した協調学習に取り組んでいる。取り組むにあたり、教育会の現職研修助成事業を活用して、山口県新しい学びプロジェクト研究協議会の先生を講師として招聘したり研究会に参加したりしてきた。

ところが、そこに昨今のコロナ禍である。知識構成型ジグソー法の中心的な活動となるグループでの話合いが新しい生活様式の中で制約を受けることとなった。コロナ禍の中でも従前の教育活動を行うことはできないかと情報収集をする中で、Zoomのブレイクアウト機能を活用した話合いを紹介していただいた。ICTの活用で、今まで通りとはいかないまでもグループによる話合いをすることができ、協調学習を進めることができている。



厚保中学校との交流協調学習

このICTの活用は、美祢市立厚保中学校との交流協調学習という予想外の展開をみせ、生徒が他校の同年代の多様な考えに触れる大変よい機会となった。令和３年11月26日（金曜日）に美祢市立厚保中学校を会場として開催される予定の「新しい学びプロジェクト公開研究会【全国大会】in 美祢」の３年生道徳科の授業にも参加させていただくことになっている。

今後も知識構成型ジグソー法とICTの活用で生徒の自信を育む指導の充実を図っていきたいと考えている。

山口県内の博物館や美術館を、
取材を通して紹介します。

やまぐち見てある記

上関町四階楼

郷土史学習館（左）と四階楼（右）

日本に一つだけ

山口県東南部、室津半島先端部に位置し、瀬戸内海に面する上関海峡は、古代から近代にかけて、海上交通の要衝として発展しました。ここに、明治12（1879）年、維新の志士小方謙九郎が、全国でも珍しい大壁漆喰の木造四階建て「四階楼」を建築しました。

小方謙九郎は幕末期に奇兵隊に入隊、四境戦争では大島口の戦いで活躍しました。維新後は室津に帰り、室津村の第1回村会議員を務めるなど、郷土の発展に努めました。我が国にスキーを紹介し、民間航空の発展に尽くした長岡外史は、謙九郎の実子にあたります。

和洋折衷の擬洋風木造建築

建築当初は饗応兼店舗、汽船宿として利用されていました。

1階は和室が2つ。6畳の玄関部分の和室には、壁に菊水紋の鏝絵があり、天井には鼠色の漆喰が使われています。奥の8畳の間には漆喰で出来た欄間があります。

2階は4・5畳の和室が3つ。1階から4階までの階段は1段が30㎝近くあり、その階段を上がります。社会見学で来た地元の小学生はこの階段の1段の高さに驚くそうです。2階から4階までは8角の通し柱とそれに取り付けられた廻り階段になっています。

3階は和室2つに茶室を備えています。6畳の和室には壁一面に唐獅子牡丹の鏝絵、4・5畳の和室には天井4隅に椿の彫刻があり、3階全体が豪華に造られています。

4階は和室18畳一間で14の窓にはすべて赤・青・黄・緑のフランス製ステンドグラスがはめ込まれています。天気がよい日は、部屋の中にステンドグラスの柔らかい色の光が差してきます。さらに、天井には5弁の花びらを象った大きなくぼみ、その中央には目を引く大きな鳳凰の鏝絵があります。

3F　唐獅子牡丹の鏝絵

1F　菊水紋の鏝絵

3F　椿の彫刻

四階楼は、大正14（1925）年から旅館「四階屋」、昭和32（1957）年から平成3（1991）年まで旅館「四海荘」として利用されていました。平成10（1998）年から12年（2000）年に保存修理工事が行われ平成17（2005）年、国の重要文化財（建造物）に指定されました。四階楼保存修復工事中の平成11年に「幣串」が発見され、建築年代、施主小方謙九郎とともに、地元大工吉崎治兵衛により建築されたことが明らかとなりました。

人を惹きつける

来館者はコロナの影響もあり昨年は年間1000人程ですが、遠くからヨットで来館される方も珍しくありません。関東の方が、大分に係留しているヨットで来られたこともありました。また、四階楼が旅館として営業していた頃のお客さんが来られて、当時を懐かしんでおられることありました。

よく晴れた日は、ステンドグラス越しの光が部屋に注いでとても美しく、その明かりを目的に、写真の愛好家が何時間も粘って撮影されることもあります。四階楼は、19時30分から22時までライトアップされるので、4色のくっきりとした色を外から撮影する方もおられます。四階楼は小さな建物ですが、漆喰壁、鏝装飾・彫刻、ステンドグラスなど、見どころいっぱいです。

また、保存修復工事に伴い付設された上関町郷土史学習館で間取り図や弊串など四階楼に関する資料や火縄銃、船の模型など、上関の歴史に関する展示を見ることができます。

4F　ステンドグラスと鳳凰

8角通し柱と廻り階段

四階楼2・3・4階の各窓は、座った時に目の高さになるように低い位置に造られたのではないかと言われています。また、建物を貫く4本の隅柱もこの建物の特徴ですが、これは外観から確認することはできません。

住　所：〒742-1403　熊毛郡上関町室津868-1
開　館：10時～17時（最終入館16:30）
休館日：毎週月曜日（祝日を除く）、祝日の翌日
　　年末年始（12月29日から1月3日）、振替休日
入館料：無料